

2016年12月18日(日)

説教:「神が共に」

聖書:マタイによる福音書1章18～25節

米国の女性作家パール・バックは、宣教師の両親のもと中国で 17 歳まで暮らす。1900 年頃のこと。貧しい中国での暮らしでクリスマスの思い出も辛いものが残る。しかしその経験が、作家と孤児支援へとすすむ。米軍人が駐留先のアジアで置き去りにし捨てた混血児たちを養子として引き取り、育てることを始める。1948年には「ウエルカム・ハウス」を開設し、常時30人から50人の子どもたちが共同生活をしていた。あの幼い時のクリスマスの辛い思い出が、パール・バックの生き方をそのように導く。

ヨセフは、マリアが自分の子ではない子を身ごもった事を知る。「正しい人」ヨセフは、彼女が姦淫罪に処せられることは余りにもしのびないことから、「ひそかに縁を切ろうと決心した」。姦淫罪とは極刑にあたる石打刑のこと。しかし神の使いが夢に現れて言う。《恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。…「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味。》ヨセフは、在り得ない夢の出来事に向き合い、マリアを信じた。ここは、「神は我々と共におられる」という言葉を信じた形で終わるのではなく、「神は我々と共におられる」という御言葉に押されて、マリアを信じたのである。そしてマリアを妻として迎える決心をする。この事は、神の御言葉がこの世で生きる証しとして、ヨセフが律法を越え、律法の掟に囚われず、この世の通りに囚われず、御言葉に押されて決断して行く。そこに、「神は我々と共におられる」という御言葉が生きているのだ。私たちは、御言葉に押され、御言葉に生きる生き方をしているか？ キリスト者は常にそのことを問われて行く。

水野源三の詩を紹介したい。彼は小学校4年時に脳性麻痺に侵された。その病床で母親が手となり足となって彼を支えた。五十音表を指さず母の指先を目で追い、まばたきで意を伝え、一文字一文字ずつ言葉を作って行く。水野さんの詩に「母が共に」(1969 年)がある。

我ひとり悩むのでなく 母が共に／我ひとり聞くのでなく 母が共に／  
我ひとり信じるのでなく 母が共に／我ひとり祈るのでなく 母が共に／  
我ひとり喜ぶのでなく 母が共に／我ひとり待つのでなく 母が共に

母が共にいるからこそ、“我”があるということをこの詩はいう。この詩はまた、「神が共に」という意味がある。インマヌエルの神とは、我ひとりではないということ。あなた一人ではない、「神が共に」あなたといることである。(神谷)